随筆

御殿場だより

＊

中嶋　弘

1．認知症と皮膚病

不肖、私は御殿場にある某療養病床型病院に勤め始めて１年８ヶ月になります（週２回）。義父がボケになりボケの軽かった義母が義父の面倒をみていましたが、８年前に義母が急逝したので義父は某老人医療施設で世話になることになりました。義父はその頃正に「恍惚の人」で、悩み苦しむこともなく100歳の天寿を全うしました。30数年前に出版された『恍惚の人』を思い出し読み直したところ、我が家がモデルではないかと思われるくらいよく似ており、驚くと共にあの時代に認知症の問題を認識し、今日の社会問題を洞察された作家有吉佐和子の慧眼に敬服しました。

そのような折も折、友人から御殿場の老人病院で働いてみないかとの誘いがありました。最近とみに物忘れがひどくなり、惚けの神様に取り付かれたようなので、行く行くはお世話になるであろう施設を見ておくのも無駄ではないだろうくらいの軽い気持ちで出かけました。着いてみると院長室の窓越しの富士は、私が自慢している松田の富士よりも遙かに雄大で、何も考えずに働くことを決めました。ところが、勤めはじめてみると松田から見えた富士も御殿場に近づくと見えなくなることが多くなり、そのうち全く見えないことの方が多くなり、入院患者の90%以上は治癒見込みのない基礎疾患を有する老人性の認知症患者で、皮膚疾患などはどうでもよいという雰囲気の中ではやる気も萎えてきました。しかし不思議なもので、富士が見えない日の方が患者さんの病気、特に皮膚病はよく見え、気力が失せていたときには見えなかったチョーク状に白濁した爪白癬などが次々に見つかるようになりました。結果は「某療養病床型病院における爪白癬の実態―とくにsuperficial white onychomycosis（SWO）について」として『Visual Dermatology』（5: 598-603, 2006）に掲載されました。これは拘縮で伸ばすことがほとんど出来ない患者さんの指を無理矢理に引き延ばしてくれた看護師さんや、爪を削っても文句一つ言わない（本当は言えない）患者さんの協力のお陰と今になって感謝しています。

いずれにせよ、認知症を伴う老人の皮膚疾患の診療は、アナムネーゼを聞くことが出来ない、自覚症状を聞くことも出来ない、したがって視診とKOH法のような簡単な検査のみで診断し、しかも経済的で効率的な治療をしなくてはならないというきわめて厳しい条件下にあることが分かりました。しかし、①帯状疱疹や丹毒などでも痛みをほとんど訴えることがない、②老人性湿疹（アトピー性皮膚炎）では激しい掻破行動を繰り返す患者が多く、ステロイドの外用では抑制出来ず、プレドニゾロンの内服を要する患者が少なくない、しかし、かかる患者が骨折しても痛みを訴えることは先ず無いなど、これまでの常識では考えられないこともある、③皮疹の炎症反応はかなり微弱で、典型的な臨床的特徴を呈することはほとんど無い、④ステロイドの単純塗布は健常人よりも一般に効果的であるが、先に述べたAD患者のように無効例もある、⑤丹毒に対するペニシリンの点滴静注は５～７日で劇的に奏功するが、治療が遅れると発熱などの全身症状がほとんど無くても重篤に陥ることがある、⑥持ち込みのMRSAは抗菌剤を１～２週間中止すれば消失することが多い、⑦診断のための検査はKOH法があれば皮膚疾患の80%以上はカバーできる、⑧褥瘡はラップ療法が有用で、壊死組織の除去さえ適切に行えば重篤な症例でも治癒することが多い、などなどを学ぶことが出来ました。

今は、「老人性認知症患者における皮膚病」の実態と病態を正しく記載した専門書の必要性を痛感しています。以上が、御殿場の片田舎で富士と皮膚病に対峙しながら、時には碌でもないことを考え、時には思い悩み、遠からず認知症患者になって行くで

あろう半惚け老人の近況報告です。

不一

追伸：先の国会で医療制度改革関連法とやらが成立し、平成18年７月１日から大改革が始まりました。新たに提示された病気区分の２～３に該当する条件はきわめて厳しく、皮膚病で該当するものはごく少数です。したがって、皮膚科医はいらないことになりますが、現実には皮膚病が断トツに多く、しかも治癒が期待出来るのは皮膚病くらいですので、看護師が喜んで併診するため、職を失うことは当分なさそうです。この度の制度は「社会的入院の解消」と「医療費の削減」のために療養型施設や医療型施設を6年間の猶予付きながら縮小ないし再編成しようというもので、遠からず「医療難民」があふれ出ると思われます。

医療難民が老後をハッピーに暮らすには、全員が「恍惚の人」になる意外にないようです。個人のためにも、家族のためにも、国のためにも。

どんとはれ

２．富士とかぐや姫

先日、『静岡県医師会報』を見せていただきましたら、富士に纏わる「かぐや姫」の話が出ていました。そこで『竹取物語』を読み直してみました。

都の近くに竹取を生業とする翁が住んでいました。ある日、根元が明るく光る１本の竹を発見し、近づいて見ると３寸ほどの小さな赤ちゃんがいました。山神様が子供のいない老夫婦への贈り物としてくださったのだろうと連れて帰り、大事に育てたところどんどん大きくなり、やがて成人になりました。そして「なよたけのかぐやひめ」と命名されました。たちまち絶世の美人がいるとの噂が宮中に広まり、５人の貴公子が求婚してきました。しかし、「かぐや姫」が受け入れの条件として求めたものは、いずれも手に入れることがきわめて難しいものばかりで、次々に花婿候補から脱落していきました。やがて噂は帝の耳にも達し、帝も求婚してきました。しかし、「宮仕えをするくらいなら死にます」と断られてしまいました。それから３年の月日が経た頃、「かぐや姫」は月を見ては物思いにふけるようになりました。そして「私は月の都の人間です。今月15日には月に帰らねばなりません」と翁に告げました。翁は帝に月への旅立ちを阻止するように依頼し、2000の兵で屋敷を包囲してもらいましたが、月からの迎えの前には無力でした。「かぐや姫」は、翁と帝に手紙や形見を残し、月からの迎えに導かれて、月に帰って行きました。帝への形見、「不死の薬」は、「かぐや姫」のいない不老長寿など意味がないとの帝の思し召しで、天に一番近い山で焼かれることになりました。以来、その山は「不死の山（富士の山）」と呼ばれ、その煙は今も雲の中へ昇っていると伝えられています、と言う話でした。

一方、富士市医師会の飯泉嘉章先生は富士市で話されてきた『竹取物語』と、富士に表れる「かぐや姫」の雪形（写真）を『静岡県医師会報』に紹介されています。

富士市は日本最古の物語『竹取物語』の発祥の地と言われています。昔は姫名村と言い、字名を「赫夜姫（かぐやひめ）」と言っていたところです。富士市で話されてきた『竹取物語』によりますと、「かぐや姫」は、姫名村の竹藪で生まれ、ここに住んでいるお爺さんと、お婆さんに育てられ大きくなりました。時もだいぶたち、自分の国に帰る日がやって来てしまいました。ある日、形見の小筐を残して、富士山に帰っていきました（『皇国地誌』より）という物語です。さて、話は変わりますが富士山は、冬強い風のため雪がおちて、山が白く見えるところが２～３日の間で、かなり変わってしまいます。そのためか２月頃、登山道のすぐ西側に、綺麗な着物を着た「かぐや姫」が表れます（写真）。昔、お世話になった人たちに御礼のため出て来て、挨拶をしているのだと言われております（第1402号『静岡県医師会報』（平成18年3月1日発行）。

「不治」の病は昔から困りものですが、古代からの夢であった「不死」は勿論のこと、「長寿」も今の日本では困りものになりつつあるようです。せめて富士の山はいつまでも「二つと無い」美しい山で、

富士山に現れる「かぐや姫」の雪形（白丸部分）
第1402号『静岡県医師会報』表紙より

「不死」の煙を雲間に漂わせ続けて欲しいと願っています。

富士に纏わる「かぐや姫」の話は如何でしたか、富士に輝く白銀色の「かぐや姫」のお礼の姿形はいかがでしたか、この雪形は残念ながら御殿場側からでは見ることが出来ません。今年の2月には富士市に行って一目だけでもお目にかかりたいと今からわくわくしています。

不一

3．富士と月見草

月見草は、広辞苑によると「アカバナ科の越年草。北アメリカ原産。茎の高さは約60センチメートル。初夏、大形4弁の白花を日暮れから開花し、翌日の日中にしぼむと紅色になる。また、オオマツヨイグサの誤称。季語は夏」とあります。これからも分かるように、太宰治の『富嶽百景』に出てくる月見草の花は黄金色ですので、オオマツヨイグサかヒメマツヨイグサというのが通説になっています。そこで『富嶽百景』を読み直しますと「私の目には、いま、ちらとひとめ見た黄金色の月見草の花ひとつ(※注:なお、右の色紙では花ふたつあります)、花弁もあざやかに消えず残つた。三七七八米の富士の山と、立派に相対峙し、みぢんもゆるがず、なんと言ふのか、金剛力草とでも言ひたいくらゐ、けなげにすつくと立つてゐたあの月見草は、よかつた。富士には、月見草がよく似合ふ」とあります。花は月見草でなくオオマツヨイグサかヒメマツヨイグサで間違いないと思われますが、新たな疑問も湧いてきました。咲いていた花は10月、御坂峠に近い郵便局からの帰り道の路傍の一カ所となっていますので、月見草にしてもオオマツヨイグサにしてもヒメマツヨイグサにしても、いずれも夏咲きの花ですので、寒冷地の神無月に咲くことはきわめて稀と思われます。一輪と言うことですので狂い咲きを否定できませんが、恐らく夕暮れ時のバスの中で同乗の老婆が「おや、月見草」と言って指さした花を作者が見たことになっているので、別の花と見間違えた可能性はないでしょうか。マツヨイグサは当時は比較的新しい輸入植物だったので、どれだけ作者が知っていたか分かりませんが、竹久夢二も「待てど暮らせど来ぬ人を宵待草のやるせなさ……」で、待宵草を宵待草と書き違えています。しかし、それがかえって作品を有名にした可能性があり、『富嶽百景』も間違えてかえって有名なフレーズになった可能性があるかも知れません。文学ではこのくらいの間違いは誤差の範囲で取り立てて騒ぐほどのものではないと思われます。

太宰治の故郷・青森県金木町（現・五所川原市）で買い求めた色紙

私が特に言いたかったことは、月見草の真偽の問題ではなく、富士を褒めるのに事欠いて外来雑草の月見草に託(かこつ)けて富士を虚仮(こけ)にした作家太宰治の歪んだ心情です。文学音痴で、ただただ富士好きの半惚け老人である私にとっては「富士には桜がよく似合う」と素直に言って欲しかっただけです。桜では文学にならないと言われるかも知れませんが、月見草ではやっぱり富士が惨めです。月見草が『富嶽百景』で有名になったと言われると、月見草が誤解されるおそれがあり、気の毒です。オオマツヨイグサは、私の家の裏を流れる川音川の川原で、夕暮れ時に富士を背景に乱れ咲くのが最も美しく、最も相応しいと信じています。

草々不一

おどろきモモの木クリニック・パートXII

宮本秀明●宮本皮フ科（横浜市磯子区）

1．患者が増えない訳

「男性型脱毛」の患者と対峙すると私より年齢も上で髪が多い方も結構いらっしゃる。「先生は内服してらっしゃらないんですか」などと問われることもあり、返事に窮する。

2．ちっぽけな感傷

この間中学に入学したばかりだと思っていた長女も高３となり、もうすぐ卒業である。ブルマにもルーズソックスにもスクール水着にもおさらばするかと思うと非常に寂しい。……というような感傷ばかりに浸ってもいられない。テレビドラマを熱心に観ているので青春熱血モノかと思いきや、なんと不倫ドラマである。「ご主人を本当に愛していらっしゃるの」「あんな主人、貴方にあげるわ」などと言う会話が「慰謝料」「人工授精」などと言う単語とともに本妻と愛人との間で激しく交わされる場面を食い入るように見ている。番組が終われば「来週の展開は……」などと楽しそうに想像しており、勉学などどこ吹く風である。部屋の隅に打ち捨ててある模擬試験結果を手にとって「合格可能性」の数値に目をやれば、メイクドラマかメイクミラクルを期待する他はない。

3．どうでもe-mail

１日の仕事を終えてパソコンの「メール送受信」をクリックするとメールがわんさか来ている。まともなのはそのうちのせいぜい１通くらいで、あとは所謂迷惑メールである。それらを自動的に「削除済みアイテム」に移動するように設定してあるのだが、それでも懲りずに次から次へと違う名前を使って送信してくる。これらのメールには２系統あり、１つは外国系、もう１つは人妻クラブ系である。前者はバイアグラと「ペニスが大きくなる貼り薬」の宣伝である。しかし一物（いちもつ）をでかくしたからって一体何だと言うのだ。これが本当の「無用の長物」と言うものではないか。後者は「もぎたて熟女を産地直送」なんだそうだが、訳がわからぬ。熟女はうちに１人いれば充分だ。ご丁寧に「送信拒否の方はここをクリック」まで設けているが、その手は桑名の焼き蛤（はまぐり）さ。そこをクリックすると「入会」にされて会費請求が来るって、NHKの「週刊こどもニュース」でやってたよ。

4．ビフォー・アフター

ダイエットの写真付きチラシを見ると「M.A.さん××歳　163cm、１年間で98kg→47kgへ」（なんと半分以下になっちゃった！）「痩せて、恋をして、結婚しました。人生変わりました」とのコメントもついている。でもリバウンドがきたらどうするんだろう。「また太って、失恋して、離婚しました」とでも書くのだろうか。確かにこんなに太ったまま（ビフォーの状態）では恋も結婚も厳しいねー。もっとも札幌ではデブコンバーといって肥満女性ばかりのホステスを揃えた飲み屋が盛況とも聞くので、特殊な嗜好の持ち主は探せばいるんだろう。しかし大抵の男性の立場からみたら、自分の相手の実体の半分以上が脂肪だと悟ったらやりきれないし「今日の残業分は妻の脂肪扶養分」と考えたら労働意欲も失せるだろう。チラシの写真の様にここまで痩せるのも偉いが、しかしよくこんなになるまで太れるね。若死にしたら新聞には死亡欄ではなく脂肪欄に載っちゃうかも。

５．イナバウアー

トリノオリンピックでジャンプやスピードスケートやトリプルアクセルをみようとテレビを点けても「床磨き」ばかり放映していた。競技自体が詰まらないので女子選手のホクロだらけの顔のアップ場面が多く、しかも他種目でもなかなかメダルがゲットできないのでますますテレビ観るのが嫌になった。大会も終盤になって京劇のスターみたいな顔がアップされたと思ったら金メダルだったのでびっくりし大いに溜飲が下がったが、スポーツ競技には観て面白いものとそうでないものがあるという事が身に染みた。

６．カミカゼガール

深キョンと土屋アンナの映画「下妻物語」を観たが、面白かった。ロリコン服が生き甲斐の少女と心優しいヤンキー娘のお話であるが、フランスでは「カミカゼガール」の題名で結構有名らしい。映画の中では深キョンは下妻―取手の50分、取手―上野の40分を乗り継ぎ、それから渋谷に出て代官山でロリコン服を買うのだが、長い道のり大変である。先年「つくばエクスプレス」が出来たから、常総線を守谷駅でつくばエクスプレスに乗り換えれば渋谷に出るのも30分ほど早くなったことを深キョンは知ってるだろうか。

ところでこの映画では茨城県の下妻の住民は服を全て「下妻ジャスコ」で買うのだが、実に田舎くさーいね。なんて思ったが考えてみりゃ小生だって横浜に住んでいるが、着る服といえば駅そばのダイエーか近所のユニクロである。たまにコナカで買うと満たされた気持ちになる。近頃は着たきりすずめで、服なんて滅多に買ってない。たまにネクタイを褒められりゃ、それは父の遺品だったりする。元町もクイーンズスクエアも一体どこの世界の話だ。

７．「月と星は天の穴」

日本一面積の狭い都道府県は大阪府だったが、今は香川県である。大阪府は埋め立てが進んで面積が増えたためらしい。確かに関空だけでもかなりの広さではある。

日本一長い鉄道は東北本線だったが、今は盛岡―八戸間（107.9km）が第３セクターとなり、分断されたものを累計しても631.3kmしかない。山陰本線は依然として連続して676kmある。これがおそらく１番長いだろう。

以上の変遷は世の動きとともにあり得るとは思っていたが、惑星の数が９個から８個に減ったのには驚いた。他の星に比して極度に小さいとか、この星だけ軌道が傾いているとか氷の塊であるとかは前から判っていたことなのに、この星の現状が変わらずとも惑星のメンバーから外されてしまうとはねー。

８．メル友

長男に「大学生になったらお父さんとメル友しような」と言ったら嫌そうな顔していたが、１年後にはその通りになった。しかし毎日メールするのも疲れる、と思っていたらやがて光ファイバーが通じIP電話も使えるようになった。IP電話→固定電話の通話料はケイタイの1/12の金額なので、通話の頻度が増えるとともにメル友率はめっきり減ってしまった。

長男のところで学園祭をやるというので、ある日夫婦で大学に出向いた。校門を抜け学術展示コーナーを散々探したところ長男の姿は一向に見当たらない。疲れ果てて焼き鳥やうどんのコーナーに行ってみると長男はテントの中で青いハッピを着て、ボインの女の子の隣で１日中綿菓子を作って売っていた。大学に入学してまで何故テキ屋の修行をしなければならぬのか、私には未だに理解できない。

９．「妻との修復」

定年後離婚の記事が紙面を賑わせている。30数年間溜めた夫への鬱憤を退職金や年金狙いで晴らそうと虎視眈々のご婦人への対処は存じないが、「退職後毎日同じ屋根の下で１日中顔を合わせているのがイヤ」と言う程度なら、対策はある。別の家に暮らせばいいのだ。……と言っても別居ではなく庭に物置小屋程度のものを置いて、朝、弁当持ってそこに「出勤」し夕方「帰宅」すれば済むのではないか。庭の物置小屋の中にはパソコン、テレビ、ビデオデッキ、ケイタイがあれば充分である。日中の妻との連絡はケイタイで行えば、よそへ行っている気分が出て効果絶大である。4.5畳～６畳程度のログハウスのキットも売っているのでそれを庭で組み立てれば単に「ログハウス好きの小父さん」と思われるだけで近所にもさほど変には思われまい。

「うちはマンションなので庭がない」とお嘆きの諸兄はどうするか。ワンルームマンションを利用する手もある。某雑誌に連載中の嵐山光三郎の「妻との修復」に「月に10日間自宅で過ごし20日間はワンルームマンションから会社に通勤して」妻との修復を果たした男の話が載っていた。ワンルームマンションの20日間は何時に帰宅しようが、誰を連れ込もうが自由であるが、その時妻も同じ立場にある。「単身赴任をしたら妻の有難みが判って仲が良くなった夫婦もある」とは良く聞く話である。ワンルームマンションは借りてもいいし買ってもいい。物件はダブつき気味なので中古なら400万円以下で買えるものは沢山ある。妻との修復を果たした暁には人に貸しても、売却してもよい。修復を果たせず、運悪く妻に母屋を取られた場合は引き続きそのマンションに住めばよい。どちらへ転んでもそうそう無駄にはならぬ。

大昔の話（Ⅳ）

＊

老祥樹

明治36年（1903）、吾輩は37歳になった。

１月中旬に香港を出航し、１月22日の夜、神戸港に着いた。西村旅館に泊り、妻の鏡、義父の中根重一、寺田寅彦※⑳らに東京着の日時を知らせた。24日の午前９時半頃に東京駅に着いた。国府津まで鏡と義父が迎へに来てくれた。新橋駅には親戚、寅彦も来ていた。取り敢へず、義父宅に落着いた。吾輩が日本に帰って来て驚いた事は妻、子供２人（１人は留学中に生まれた）が極めて貧しく見へた事だった。義父は既に官位の職を失い、株に手を出し失敗し、昔の面影はなかった。義父宅にいつまでも世話になっている訳にもいかず、借家探しに毎日、山の手方面を散歩した。大塚保治※⑯から150円借金した。吾輩は熊本の五高に帰る気はまったくなかった。

東京で職を得て東京で暮らしたかった。だが、五高では吾輩が五高に復帰する事を強く望んでいた。しかし、吾輩はどうしても東京に留りたかった。狩野亨吉※⑨、大塚保治らの世話で一高の英語嘱託、東京帝大英文学科の講師が決まったのは４月になってからだった。一高の年俸は700円、東京帝大の年俸は800円だった。３月には本郷千駄木町に居を構へた（この住居は森鷗外※⑬も住んだ事があり、現在は愛知県犬山市の明治村に保存されている）。家賃は月、25円だった。

東京帝大講師が吾輩に決まったので小泉八雲は辞めなければならなくなった。八雲の留任運動があったが、結局、彼は東京帝大を辞職し早大の講師になった。さて、吾輩は東京帝大で午前はジョージ・エリオットの「サイラス・マーナー」、午後は「英文学概論」の講義を始めた。程度が高かったためか学生はよく理解できなかったようで、真面目に聴講する学生は少なかった。上田敏㉟も同時に開講した。彼は文壇的には吾輩よりはるかに有名だった。４月末には五高を退職した時の一時金賜金（退職金）が300円出たので借金の返済にあてた。５月には一高生の藤村操※㉛が日光華厳の滝で投身自殺をした事を知り大きな衝撃をうけた。実は吾輩は自殺の数日前、講義の時、彼の不勉強を指摘したからだ。

だが無関係だった。彼の自殺した華厳の滝はそれ以来有名になり、自殺者は10数名に達した。安倍能成※⑲はのちに藤村操の妹と結婚した。６月中旬「英文学概論」の試験を行う。問題は「４月以来口述せし講義の大要を述べ、且これを批評せよ」とした。１時から試験は始めたが、３時に至るまで誰一人提出する者はなかった。問題が難しかったのかも知れない。或いは問題が余りにも漠然としていたためだったようだ。この頃、午後或いは夜になると寅彦がしばしば吾輩宅に現れるようになった。彼はただ来るだけで、なんとなく帰る事もあった。７月になると吾輩は神経衰弱がひどくなった。妻も悪阻がひどくなった。吾輩はいらいらするばかりで妻に当り散らした。

そこで妻は子供と一緒に実家で過す事となった。

吾輩はますます神経衰弱がひどくなったので、近所の医者の紹介で東京帝大の呉秀三の診察をうけた。しかし、特別の治療はうけなかった。気分を落ち着けるため、この頃より水彩画を描くようになった。９月になり妻、子供達も実家より帰って来て、別居生活は終わった。新学期になり、「英文学概論」を開講し、同時に「マクベス」の講義を開始した。「マクベス」の講義は学生達の評判はよく、大きな20番教室は学生で満員だった。この頃、永井荷風は横浜港を出港し、アメリカを経由してフランスに向かった。相変わらず寅彦は毎日のように吾輩宅に来る。10月末に尾崎紅葉が38歳で世を去った。11月３日に三女エイが誕生した。

「マクベス」の講義は益々好評で文科大学最大の教室も満員になる程だった。冬に近づくと吾輩の神経衰弱はまたまたひどくなる。妻達を実家に帰そうとしたが、離縁は双方の合意がなくては不可と知らされ、そのままにした。

師走になり、『マクベスの幽霊に就て』を脱稿し、『帝国文学』に掲載された。

明治37年（1904）吾輩は38歳になった。

正月に郷里高知に帰っていた寅彦が来て、土産として蜜柑と銅硯を持って来てくれた。

２月になり「マクベス」の講義が終了し、「リヤ王」の講義を始めた。「リヤ王」は「マクベス」以上の人気で20番教室は超満員で聴講者を制限する程だった。41歳になった二葉亭四迷[36]が「大阪朝日新聞」の東京出張員となり、月給100円だと聞いた。この頃、昔の養父などが金の無心に来るようになった。吾輩はけっして豊かな訳でもなかったので明治大学の講師を兼任する事にし、週４時間講義して、月30円を得た。

ノイローゼは持続していたが、大学の講義は続けた。講義の準備のために勉強したノートは膨大な量になった。初夏になりノイローゼは小康状態になった。５月には「新潮社」が創業された。煙草の「朝日」が10銭で売り出されたので吾輩は愛用する事にした。夏になり転居したくなったが適当な家が見つからない。義父・中根重一が借金した高利貸から迫められているから借用書に判を押して欲しいと依頼されたが断り、菅虎雄※⑪から250円借りて義父に用立てた。妻は質屋通いをしているようだ。

吾輩は高浜虚子※⑮と俳体詩と云う新形式を創案し、新体詩、連句などと共に『ホトトギス』に掲載した。秋になると寅彦は東京帝大講師になり、鈴木三重吉[37]が東京帝大英文科に入学した。『明星』に与謝野晶子の「君死にたまふことなかれ」が載り、吾輩は「リヤ王」「英文学概論」の講義を再開した。相変わらず遊びに来る寅彦の他に学生達も何人か吾輩宅に来るようになった。八雲が死去した。55歳だった。『ホトトギス』の虚子もしばしば遊びに来ていたが、或日突然彼から何か文章を書いてみないかと奨められた。吾輩も少しは気分が紛れると思い、思いつくまま書き始めた。それが後に有名になった『吾輩は猫である』（『猫』）の一回分だった。これが吾輩を一躍有名にした最初の散文だった。12月になり「ハムレット」の講義を開講し、『倫敦塔』を書きはじめた。一回限りのつもりで書いた『猫』は正岡子規の旧居で開催された「山会」で虚子により朗読された。評判は極めてよかった。師走になり『倫敦塔』『カーライル博物館』を脱稿した。

明治38年（1905）、吾輩は39歳になった。

昨年暮に書いた散文の題名は吾輩は『猫伝』にしようかと思ったが、虚子が書き出しの『吾輩は猫である』ではどうかと云ったのでそれに従って、『ホトトギス』の１月号に掲載した。

正月３日に虚子、橋口五葉[38]、橋口貢らを吾輩宅に招き、猪肉雑煮をふるまった。正月中に『猫』の続扁を書いた。前回の３倍位の長さになった。新学期がはじまり「ハムレット」の講義を再開したが、「リヤ王」「マクベス」の時の聴講生の１／３位だった。寅彦は毎日の様に来る。

『幻影の盾』を執筆する。最近吾輩は何かを文章にしたいと自然に盛り上がる気持ちと意欲を抑へる事が出来ないようになった。毎月１回吾輩宅で「文章会」を開くことになった。虚子、坂本四方太、寅彦、皆川正禧、野間眞継、野村伝四[39]、中川芳太郎[40]らが集った。殆んどが吾輩の教へ子達だ。会は虚子が『猫』を朗読する事から始まった。4月上旬に吾輩宅に泥棒が入り、着物、下着などが盗まれた。『琴のそら音』を執筆する。

寅彦が『ホトトギス』に『団栗』『龍舌蘭』を発表する。そうこうしているうちに吾輩は教師にはむいていない、むしろ文学者として世に立つ方が良いのではないかと思うようになった。

吾輩宅には来客が多くなり、大学の講義を休むよ

うになり、やっと５月末になり学生の論文の審査を終へた。『猫』の原稿料として15円也を貰ったので、パナ帽を買った。「日本新聞」から不定期の執筆依頼をうけた。毎日一欄ほど書いて10円くれるなら学校を辞めてもいいと思ったが、それでは新聞社は承知しないだらうから、しばらく赤門で講義して暮らすことにした。７月末に『一夜』を脱稿した。夏休みになり、相変わらず毎日のように来る寅彦と上野に落語を聞きに行ったが満員だったので浅草公園を散歩し、有楽町で夕食をとった。９月初旬にロンドンで一緒だった大塚武夫に連れられて東京帝大独文科に入学した小宮豊隆※㉚が来て保証人になってもらいたいと言はれた。三重吉から長さ３間（約５メートル）の手紙を貰った。９月中旬にまた泥棒に入られた。泥棒は三重吉の長い手紙を引っぱり出し、家外の畠にまで手紙は続き、最後に排便の尻ぬぐいに使われていたのには驚いた。新学期になり「十八世紀英文学」を開講した。が、教師を辞めたい気持は益々強く盛り上がり、創作意欲は強くなるばかりだった。しかし学校では「オセロ」評釈、「あらし」「ヴェニスの商人」「ロメオとジュリエット」評釈も開講した。これらの講義は吾輩が東京帝大文科大学を辞めるまで続けた。９月末に『猫』（六）を脱稿した。野上豊一郎※㉙が東京帝大英文科に、谷崎潤一郎が一高に入学した。10月６日に『猫』上扁が大倉書店、服部書店から出版され、初版は20日間で売り切れたと聞いて驚いた。

10月中旬に上田敏の『海潮音』が出版された。

この頃になると余りにも来客が多くなったので門下生にしばらく来ないように伝へるも翌日に寅彦が来た。が、すぐ帰った。11月になり『猫』上扁の印税を貰った。印税は１割５分だった。初版の部数ははっきり覚えていない。（注：1000部だと142円20銭、2000部だと285円）

印税で吾輩は外套（がいとう）と二重廻を誂（あつら）へ、残りは年末の費用と妻の出産準備金とした。11月末に『太陽』の編集をしていた大町桂月㊶から原稿依頼があったが、多忙だったので断った。

赤坂で寅彦と芸者と遊んだ。楽しい一夜だった。『趣味の遺伝』『猫』の（七）（八）を脱稿。12月14日四女アイが産まれた。『ホトトギス』に載った伊藤左千夫の『野菊の墓』を読んで大いに感銘をうけた。

暮れの支出は300円になった。心して貯金しなければと思った。門下生は多くなるばかりで内田百閒㊷も加わった。この年は東北地方は大凶作、日露戦争で負傷者兵は15万人に達したようだ。

注：人名、一部再掲載（※）。①～⑲は「神皮 No. 11」P. 20～21、⑳～㉕は「神皮 No. 12」P. 13、㉖～㉞は「神皮 No. 13」P. 20参照。

⑳※ 寺田寅彦（寅彦）：東京帝大物理科卒、東京帝大教授

⑯※ 大塚保治：吾輩の２年先輩、東京帝大教授

⑨※ 狩野亨吉：吾輩の兄事した先輩、京都帝大初代文科大学長

㉟ 上田　敏：東京帝大英文科卒、ケーベル、小泉八雲の指導をうけ、外遊後、京都帝大教授

㉛※ 藤村　操：一高在学中に日光華厳の滝で自殺

⑲※ 安倍能成：東京帝大哲学科卒、学習院々長

㊱ 二葉亭四迷：本名長谷川辰之助、東京外国語大学露語科中退、24歳で『浮雲』を発表

⑪※ 菅　虎雄：東京帝大独文科卒、吾輩の大学時代からの友人

⑮※ 高浜虚子：正岡子規の後継者、俳人。『ホトトギス』を刊行

㊲ 鈴木三重吉：東京帝大英文科卒、雑誌『赤い鳥』を創刊

㊳ 橋口五葉：東洋美術学校、洋画科卒、『吾輩は猫である』上扁の装幀を担当

㊴ 野村伝四：東京帝大英文科卒、吾輩の門下生、奈良県立図書館長

㊵ 中川芳太郎：東京帝大英文科卒、八高教授、吾輩の『文学論』の出版に携わる

㉚※ 小宮豊隆：東京帝大独文科卒、のち東北帝大教授、吾輩の門下生の中心的人物

㉙※ 野上豊一郎：東京帝大英文科卒、のち法政大学教授

㊶ 大町桂月：東京帝大国文科卒、『吾輩は猫である』にはじめての貶評を述べた

㊷ 内田百閒：東京帝大独文科卒、のち法政大学教授。小説家、随筆家